

書評と紹介

Ian Reader

Making Pilgrimages: Meaning and Practice in Shikoku

University of Hawai'i Press, 2005

xiv + 350 pp. \$55.00

真野 俊和

著者 Ian Reader 氏は、いわずと知れた、ランカスター大学教授にして日本宗教研究の第一人者である。その著者がついに四国遍路に関する著書を公にした。もしこれが日本語で書かれていたなら、日本人による巡礼Ⅱ四国遍路研究にとってきわめて刺激的だったと思うのだが、(平均的な日本人にとっては)残念なことには英語による書物である。それは著者の巡礼論が日本語圏に限定されない普遍的な舞台で議論されるということであると同時に、日本文化以外の場所で呼吸する人々にむけた、日本における巡礼習俗の紹介という意味あいも持つということにもなるであろう。

本書の表題は *Making Pilgrimages* である。これをどのような日本語で表現すればそのニュアンスを過不足なく理解できるのか、評者の英語力ではまことにおぼつかない。ただかすかに手がかりとなるかも知れないと考えたのは、メイン・タイトルがけっして *Study on Pilgrimages* でも *Structure of Pilgrimages* でもなく、ましてただの *Pilgrimages* でもなく、あ

くまで *Making Pilgrimages* なのだという点である。すなわち著者は本書のテーマを、巡礼の研究とか構造とか、あるいは端的に「巡礼」などと、なにしろそこに立ち止まってしまいう名詞としてではなく、「巡礼すること」あるいは「巡礼にでかけること」というように、いままさに人々が行動し続けている、その姿のままにとらえようとするところに設定したからなのではないのか。

こんな問題は著者に直接たずねてみる機会があれば、たちどころに氷解する疑問にすぎないのはまちがいない。表題を考える段階でほかのようなアイデアがうかび、それらのなかからどのような基準あるいは感覚で *Making* ということばを選んだのか、著者自身がいちばんよくわかっているはずだから。しかしもちろんそうではないのかも知れない。英語の動名詞にはもはや動詞としてのニュアンスなどないのかも知れないし、あるいはたんに出版社の販売戦略(ハワイ大学の出版なのだからそんなことはありえないが)が選び取ったスタイルにすぎないということもありうるだろう。そうはいっても多数の選択肢から何かを選びだすとき、その理由をたとえ意識しなかったとしても、やはりそこにはなんらかの必然性があるはずであろう。

さて本書は *Introduction* と *Conclusion* を別にして、八つの章からなる。ただし著者自身の構成意図によれば、全八章は大きく三つの部分に分かれるという(「部」という単位やタイトルが明示されているわけではないが、これを仮に「部」と呼ぶことにする)。また各章はすべて一〇以上、ときには二〇以上

の、「節」と呼ぶには少し小さいセクションに分かれていて、それぞれに内容を表すタイトル（ほとんどがサブタイトルをともなう）がつけられている。そのため、それらのタイトルをたどっていくだけでも、本書のおおまかなストーリーは把握できらるだろう（仮にこれを「節」と呼んでおく）。

第一部は最初の三章からなり、全体として巡礼という宗教習俗の一般的な姿の記述にあてられる。といつてもたんに巡礼習俗概説といったところにとどまらず、相当程度に理論的なところにまで踏み込んでいく。全般に本書においては、データ提示と議論との間をかなり頻繁に往復しながら記述が進んでいくところに特徴がある。

1 Pilgrimage, Practice, Meanings: Making Pilgrimages in Shikoku

前半の数節はまさに四国遍路のオリエンテーションである。すなわち弘法大師、霊場、納め札、納経帳・納経掛け軸、杖などの基本的なアイテムが紹介される。後半では、それにもかかわらず巡礼がひとくくりでは理解できない多様性が述べられる。たとえば (inter)national pilgrimage と local pilgrimage など、分析のためのさまざまな概念や様相が提示される。

2 Making Landscapes: Geography, Symbol, Legend, and Traces

ここで語られるのは、四国霊場というものを作り上げている意味群である。弘法大師が四国霊場を草創したという伝説に基づく遍路習俗そのものから、霊場全体を発心、修行、菩提、涅槃にわけるといふコスモロジー、四国を死の国だとする観念や

遍路習俗をいろどる死のシンボリズムにいたるまで、多様な意味づけが紹介される。本章で著者は風景あるいは地理について述べるのだが、それは目に見える風景・地理ではなく感情的 (emotional) なものであるという。この emotional という語は、本書を通じて一つの重要なキー・ワードになっているといつてよい。すなわち emotional terrain, emotional landscape, emotional power といった具合で、最初から最後まで頻繁に登場する語となっている。

3 Making Pilgrimages: Pilgrims, Motives, and Meanings

本章では、巡礼者とはどのような人々のことであるか、という問題がテーマである。年間数十万人にのぼると推測される巡礼者たちが四国にやってくる動機はさまざままで、著者は、むしろ個々の巡礼者のプロフィールを描きだすことに力をいれる。まえがきで著者は、この本のために数百人の人々にインタビューを行ったと書いている。そこに現れてくるのは生活の余裕がもたらす巡礼、苦行の巡礼、あるいは病氣平癒やその感謝の巡礼、そして失恋を動機とする巡礼などなどの姿である。巡礼者の移動はバス、タクシー、自家用車、公共交通機関、徒歩など多くの手段があり、いっぽう一四〇〇キロメートルにおよぶ行程にせきたてられて、先を急ぐという気持ち強い。そうした諸条件が、アンケートなどによる統計的把握を困難にしているのはまちがいない。巡礼者の個人的な動機や方法などの多様性を具体的に把握するためには、時間と手間をかけた地道な出会いを積み重ねるのがやはり最善なのであろう。

次の四番目、五番目の章からなる第二部では、歴史の問題に

書評と紹介

移る。

4 History, Footsteps, and Customs: Making the Pre-modern Pilgrimage

サブタイトルにあるように、第四章は明治より前の時代の巡礼史を見ていく。ここは従来の研究史のなかで、おそらく最も業績の積み重ねられてきたところである。著者も先行研究を丹念に追っていく。

5 Shaping the Pilgrimage: From Poverty to the Package Tour in Postwar Japan

著者の独自の視点が現れるのは、むしろ近代以降、とりわけ第二次世界大戦後をとりあげた第五章であろう。一九五〇年以降は、四国遍路の歴史にとって画期的な変化が訪れた時代であった。著者は商業巡礼 (commercial pilgrimage) の時代と、これを位置づける。すなわち敗戦からの回復とともに巡礼者の数が大幅かつ急速に増加しただけでなく、バス会社が巡礼のためのパッケージ・ツアーを商品化し、巡礼団体を組織するエージェントが生まれた。いっぽうそれまで相互にほとんど没交渉だった札所寺院が、連携のために四国霊場会を結成しただけでなく、先達なる制度をも創始した。このことによって、巡礼の場に擬似的な宗教組織がもちこまれることになったといえる。その後、徒歩による巡礼者たちは増加の一途をたどりつつあることは周知のとおりである。こうして今日の巡礼ブームのなかで、数的には圧倒的に少ないながらも、徒歩巡礼とバス巡礼は巡礼界の勢力の一翼をそれぞれ構成することになった。

最後のセクション第三部の、とりわけ第六章、第七章は本書

の白眉である。第五章において抽出された徒歩による巡礼とバスによる巡礼とを対比させることによって、それぞれの立場から見えてくる巡礼というものの姿を描写しようとする。

6 Walking Pilgrimages: Meaning and Experience on the Pilgrim's Way

本章ではおそらくは著者自身の経験もふまえながら、徒歩による巡礼者たちが巡礼のあいだにであうさまざまなこと―事物や心理など―について述べている。たとえば著者は、ある遍路が口にした「遍路ほけ」という表現に興味を持つ。著者はこれを一種の没我状態と解釈し、それを徒歩巡礼がもつ普遍的な心理上的特徴と考えているようである。また巡礼の儀礼論的解釈に主な関心をおいているわけではない著者は、巡礼をするにあたって解決しなければならぬ現実的な諸問題、すなわち寝ること、食えること、用便をすることなどにむしろ目をむける、また徒歩が移動の主要な手段であった時代ならともかく、現代において長距離移動の道はことごとく自動車道であるから、交通事故の危険や騒音、そしてときおり遭遇するトンネルなども巡礼者たちを苦しめる。札所での経験そのものも、時には巡礼者たちにとって不満をつのらせる原因になる。納経をしてみらおうと納経所に行けば、大きな巡拝団が持ち込んで山積みになった納経帳に長い待ち時間を強いられ、寺の宿坊からもしばしば閉め出されるからである。こうした必ずしも巡礼者たちにとって幸福とはいいかねる環境にもかかわらず、少なからぬ巡礼者たちは再び四国に戻ってくると、著者は言う。この最後の発見が最終章のテーマとなっていく。

7 Making Bus Pilgrimages: Practice and Experience on the Package Tour

徒歩巡礼者たちにとつていささか敵役的役まわりを背負わされたバス巡礼を、しかし著者はけつして否定的に切り捨てようとはしない。むしろこの巡礼形態へのまっとうな関心こそが、本書の可能性をより高いものにしていくといえるだろう。本章は著者自身が参加したバスツアーの体験に基づいたバス巡礼の描写である。巡拝はみごとに組織化されており、きわめて効率的に遂行されるから、徒歩巡礼の場合にしばしば強調されるような、劇的な体験や葛藤があらわれるわけではない。ある意味では退屈と評されてしまうかも知れない描写が淡々とつづくだけである。だから、著者自身もいささかこの章をもてあましていくように見える。しかしかれらを物見遊山の巡礼として片付けてしまつてはなるまい。信仰の旅か物見遊山の旅かという対立図式がしばしばこの実態を見誤らせてきたことは、評者ならずともしばしば指摘してきたことであつた。

8 A Way of Life: Pilgrimage, Transformation, and Permanence

著者の関心は、ゴールにたどりついた巡礼たちのその後にまで及んでいく。著者は「四国病」という巡礼たちの表現に導かれて、彼らの人生そのものを変えていくきっかけとしての巡礼体験について考察を深めていく。すなわち著者は、巡礼という民俗宗教のなかに、一回限りの閉じられた儀礼の小宇宙に収まらざるに普遍的性を見いだそうとしているのである。

さて日本の巡礼習俗に関する研究も、もう相当に長い歴史を刻んだといつてよからう。新城常三氏の大著『社寺参詣の社会経済史的研究』（一九六四年、塙書房）により、歴史の中で広い眺望を手に入れた研究者たちは、その後宗教学、民俗学、社会学等々、それぞれがよつてたつ学問領域からの発言を続けてきた。その間、巡礼という習俗そのものにも曲折があつた。なかでも四国遍路習俗は隆盛の一途をたどつてきたといえる。評者が三十年ほど前に巡礼研究に関心を持ち始めたころにおいても、徒歩の遍路は決して少なくはなかつたし、巡拝バスによる団体バス参詣もそれなりに盛んだった。しかし佐藤久光氏によれば―その根拠となるとかならずしもはつきりとはしないのだが―、一九七八年から二〇〇二年までのおよそ四半世紀の間に、実に四倍強の増加をみせたという（『遍路と巡礼の社会学』二〇〇四年、人文書院）。いっぽう研究面では右のような学問分野のなかでいくつもの個別研究が生み出されただけでなく、もっと大規模な研究プロジェクトや研究集団が見られるところまでやつてきているし、早稲田大学で巡礼をテーマとした通年の授業（『現代社会と巡礼―四国遍路と遍路道の社会学』）が組まれてから、もう五年ほどになるであろうか。

それにもかかわらず一種の閉塞感がただよつてくる印象を、評者は時として持つことがある。本格的な巡礼研究草創期に提出された議論の枠組みや論点、さらに史実のディテールが精緻化されることはあつても、そこから先への展望が開けてこない。このような印象がどこからやつてくるのだろうか。実のところそれを論じはじめたらどうして書評の域に収まらない大き

書評と紹介

な課題になってしまいうだろう。

ただ少なくとも一つの要因を指摘するならば、研究者たちも無意識のうちに陥った一種の価値序列にあるのではないか。というのは巡礼者たちの世界において、徒歩巡礼とバス・自動車巡礼とは、厳然たる上下関係のもとにイメージされている。そしてじつは研究者自身もある程度同じ価値観のなかにとりこまれてしまっているため、研究者たちの関心はまず徒歩巡礼に向かいがちであったと考えられる。いっぽう本書の記述を待つまでもなく、実態としては今日すでに圧倒的なバス・自動車巡礼の時代に移ってきているのである。研究者の目は時代に取り残されているのかもしれない。けれどもバス巡礼の場合でも、大きな充足感を心におさめて帰っていく巡礼者の姿を発見することは十分に可能なのである（石本敏也「アルバムの中の巡礼——編集しなおされる四国八十八箇所」『日本民俗学』二四一、二〇〇五年、日本民俗学会）。

あるいはつぎのような事実をあげることできる。接待という風習をめぐって、地域住民が巡礼者に対して与える無償の厚意としてとらえ、その背後に大師信仰を見て取ろうとする、きわめて伝統的な見解がある。それに対して近年の善根宿を対象とする実態調査での事例によれば、巡礼者といえども善根宿をうけたならば、掃除をしていくなど相応の感謝の意を行動で表して行くべきだといった考え方も現れているという。そうした意見を述べた複数のインフォーマントは、奇しくも四国以外の出身者であったという点が興味深い。またある村では巡礼者たちの多大な助力によって地域の仏堂の修復がなったものの、結

局それは巡礼者たちの宿泊施設として使用されることはなく、管理上の問題を理由に、むしろ巡礼者たちを拒絶する結果となつてしまったというできごとも報告されている。⁽¹⁾これらの事例はいずれも、巡礼者と地域住民とのあいだに親和的とばかりはいえない関係が生まれていることを示している。もちろん非親和的な関係は近年にはじまったことではないが、右のできごとはいくまで接待・善根の場であらわれたものであるという意味で、過去のそれとは別ものであるといつてよい。だから右のような現象が、たんに見落としていた事実の発見にすぎないのか、それとも世相の変化によって新しく生まれた事態なのか、十分な検討を必要とすることはまちがいない。

こんな風に見てくると、巡礼の実態としてもうひとつ残ったのは、自家用車による巡拝方式である。しかしこれは著者がスポットをあてた二種の巡拝方式——徒歩とバス巡拝——にくらべると、調査は格段にむずかしくなるにちがいない。なにしろ調査者が巡礼に同行しながらインタビューや観察を行うことがほとんど不可能だからである。いずれなんらかの調査法が案出されることを期待したい。

評者が冒頭で示唆したように、本書が先に述べたような視点の固定化を極力さげようとする方法論のもとで生み出された成果であることは疑いない。さきに紹介した、従来の巡礼研究の認識枠組みにおさまりきらない接待・善根をめぐる事例が、いづれも専門の巡礼研究者による調査の成果ではなく、学生の卒業論文や修士論文の研究にもとづく素朴な発見であったというのは、皮肉であると同時に示唆的でもあると言わねばなるま

い。著者はその結論の章で、一度はさまざまに ambivalent な様相を列挙しながら、結局はそうした枠組みで巡礼をとらえることを拒否する。評者はそうした著者の基本姿勢を支持したい。自ら歩いてみることに、自らバスツアーの一員となってみること、そうした積み重ねからしか、この閉塞状況は突破できないだろうからである。

注

(1) 両報告とも、評者が勤務する大学に提出された卒業論文および修士論文によったものである。

早川紀代秀・川村邦光著

『私にとつてオウムとは何だったのか』

ポプラ社 二〇〇五年三月二五日刊
四六判 三三九頁 一六〇〇円十税

島田裕巳

本書は、オウム真理教の幹部で、教団の建設省大臣の地位にあった早川紀代秀がつづった手記と、早川の裁判において弁護側証人として証言を行った宗教学者の川村邦光によるオウム真理教の事件、ならびに早川が数々の凶悪事件に関与するまでの経緯についての分析の二つから構成されている。前者が本全体の三分の二を占め、残りの三分の一が後者にあてられている。

オウム真理教の幹部のなかで、一審ならびに控訴審において死刑、ならびに無期懲役の判決を下された者は、教祖である麻原彰晃を含め十八名にのぼる。なかには、岡崎一明のように、最高裁において死刑判決が確定した者もある。そのうち、これまでまとまった手記を発表しているのは、医師で教団の治療省大臣をつとめ、地下鉄サリン事件ではサリン散布の実行犯となつた林郁夫だけである。林の場合、判決は無期懲役であり（現在服役中）、死刑判決を受けた教団幹部の手記は今回がはじめてということになる。

とくに早川は、一連の事件の発端となる一九八八年に起きた